

東南アジア諸国のいま  
～統計数字から見える各国の多様性と今後の発展～  
一般調査報告書

要旨

バンコク産業情報センターは新たな体制で新年度の事業を開始いたしました。最初のレポートでは、統計データを比較することで、東南アジアを中心とする当センター所管エリアの国々の位置付けを把握してみます。人口、GDP、平均寿命、国内格差、労働力に関する統計を、国別、時間別に比較することで、地域全体が経済発展を続ける姿や、各国の経済規模を捉えるとともに、今後の発展性を議論します。

1. 過去 30 年間におけるアジア諸国の成長

「データや事実にもとづき読み解くと、世界は確実に良くなっている。」これは、世界中で 200 万部の大ベストセラーとなった FACTFULNESS [Hans Rosling, 2019]で提唱されたメッセージです。著者らが運営する Gapminder Tools [GAPMINDER, 2020]を活用することで、図 1 において東南アジアを中心とする国々の成長の軌跡を描いてみました。

縦軸は公衆衛生の指標である平均寿命、横軸は所得の指標である 1 人あたり GDP で、各国の位置を人口サイズに応じた円でプロットしています。

まず注目されるのは、各国の円のサイズの違いではないでしょうか？アジアの国々には、中国、インド、インドネシアといった多くの人口を抱える国からシンガポール、ラオス、カンボジアといった人口の少ない国まで人口規模に大きな違いがあります。

本書では、所得レベルに応じて、低所得のレベル 1、中所得のレベル 2 及び 3、高所得のレベル 4 の 4 段階に区分します。日系企業の海外進出が本格化し始めた 30 年前には、大国である中国、インドを含めた多くの国がレベル 1 に位置していました。しかし、2018 年までの間、各国で衛生環境

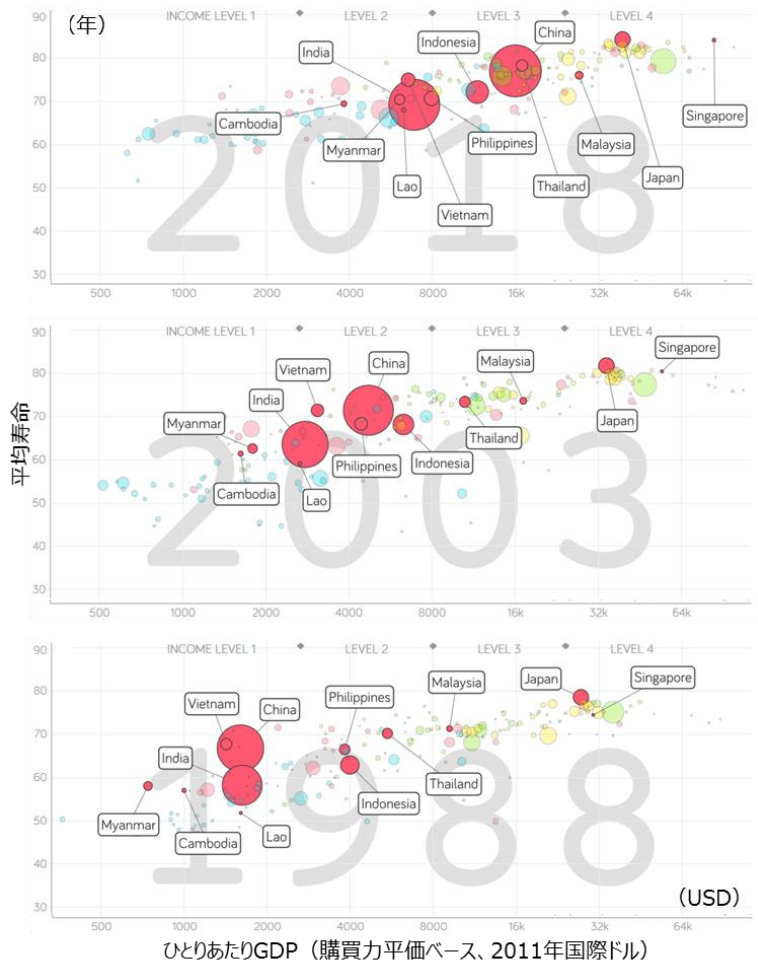


図 1 各国の成長の軌跡  
(Gapminder Tools を使用して作成)

の改善と経済成長が続いたことから、全てのチャートが右上へ移動し、多くの国々が中所得国入りしている様子が見て取れます。急速に日本と東南アジア諸国との差が小さくなる中で、従来の先進国と発展途上国に2分割された世界観を改める必要性を強く感じます。ただし、チャートは各国の平均的な所得を表しているに過ぎません。アジア各国へ旅をして、ピカピカの高層ビルのすぐ横に広がる昔ながらの生活様式を目の当たりにしたり、日本人が訪れることの少ないアジアの農村部に想いを巡らせたりすると、経済成長が一様に進んでいることには疑問があります。

## 2. 国別格差の推移

各国の所得格差は、経済発展の過程、政治体制、文化・歴史、教育制度など様々な違いを背景としています。図2において所得格差を測る指標であるジニ係数の国別推移を比較します。各国が公表するジニ係数は算定方法の違いがあり国際的な比較にふさわしくないため、推計によって標準化されたデータ [Solt, 2019]を使用することとしました。

日本においても、近年は国内の所得格差が拡大しているという報道を良く目にすることを裏付けるように、ジニ係数が

増加傾向にあります。しかし、東南アジア諸国のジニ係数は日本のそれと比較してさらに大きく、社会的不安定化の警戒ラインといわれる40を上回る、格差の大きな国も多くあります。

格差の拡大と経済成長の関係については、工業化が進むにつれて所得格差が一時的に広がり、その後、都市化の進展や、社会の民主化による所得再分配などにより、不平等度が改善すると言われています。格差の拡大が継続しているインド及びインドネシアでは、広い国土と多くの人口を抱えていることから、まだらな経済発展が続いており、そのジニ係数の増加は産業間の格差に加えて地域間の格差が拡大していることを反映しているものと推測されます。

格差が縮小傾向にあるタイ及びマレーシアでは、社会の成熟が進む段階に入っているとも考えられます。実際タイでは、景気刺激を目的とした生活費負担軽減措置としての現金給付など、低所得者層に対する社会保障が充実化されたことから所得格差が縮小したといわれています。

## 3. 国別産業構造の比較

次に、経済成長や国内格差の主要因となる産業構造に注目します。図3では、[ASEAN Statistical Yearbook 2019, 2019]を利用して ASEAN の主な国々の GDP、労働者数及び労働生産性を、農林水産、工業・建設及びサービスの産業分野毎に比較しました。図1からも明らかですが、各国の GDP 及び労働者数の差が大きいことが印象的です。①の産業別 GDP に注目すると、シンガポール、タイ、マレーシア及びフィリピンでは農林水産のシェアが10%を下回っており、その他の国と比較して工業・建設やサービスが発展した産業構造であると言えます。②の産業別労働者数では、海外進出先における新たな働き手の確保という視点からは、

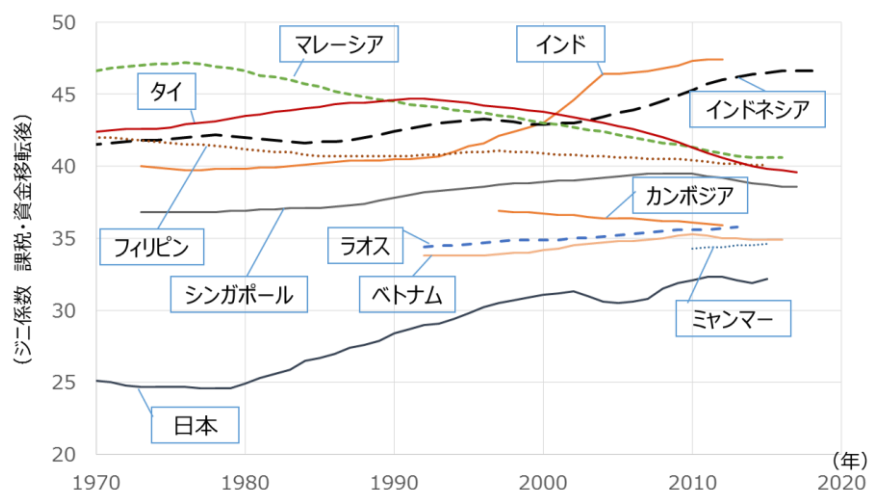


図2 各国のジニ係数の推移  
(Solt (2019) のデータに基づき作成)

農林水産に従事する労働者の数の多いインドネシア、ベトナムといった国が投資先として魅力があると考えられます。

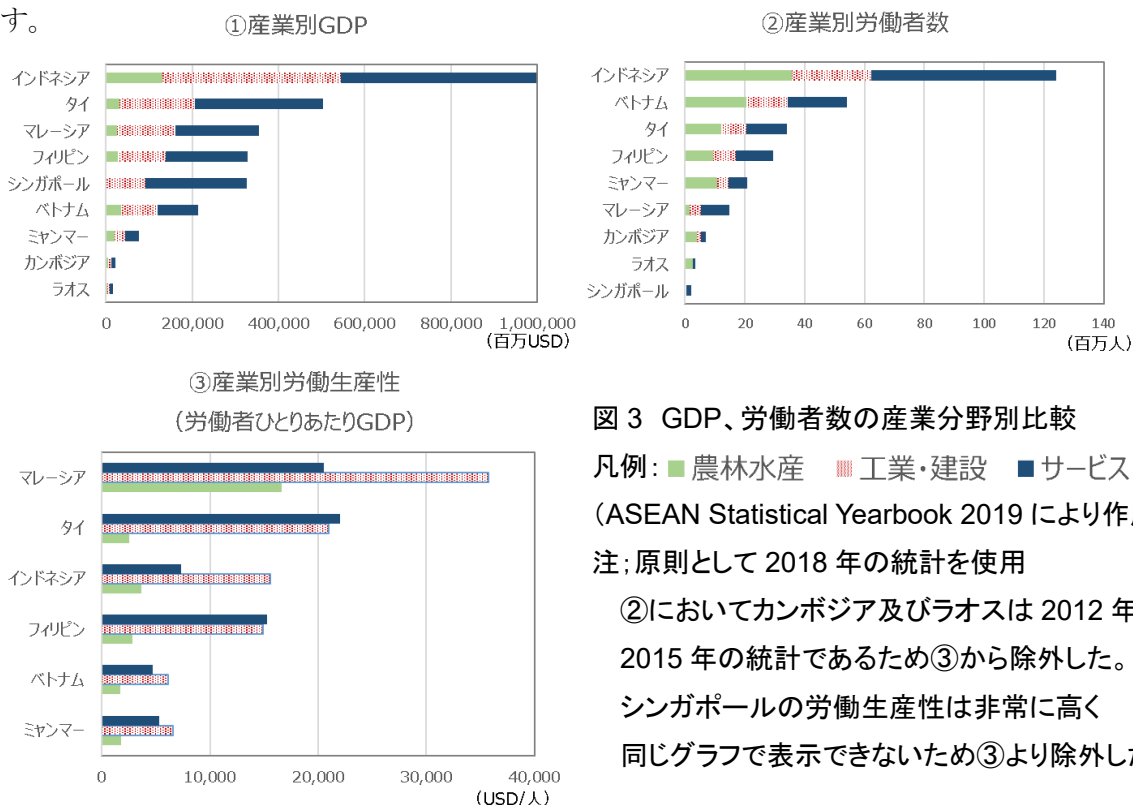


図3 GDP、労働者数の産業分野別比較

凡例: ■ 農林水産 ■ 工業・建設 ■ サービス (ASEAN Statistical Yearbook 2019 により作成)

注: 原則として 2018 年の統計を使用

②においてカンボジア及びラオスは 2012 年及び 2015 年の統計であるため③から除外した。

シンガポールの労働生産性は非常に高く 同じグラフで表示できないため③より除外した。

③の産業別労働生産性では、①と②の比を取ることで、各国・産業別の効率性を比較しました。グローバル企業の拠点が集中し人口が少ないシンガポールは労働者ひとりあたりの GDP が工業・建設と比較してマレーシアの 7 倍、ミャンマーの 40 倍と極めて高いためグラフから除外しました。グラフの 6 か国を比較しても同じ産業分野間で数倍の差が見られ、これまでの産業集積の違いを反映していると思われます。また、いずれの国も、工業・建設及びサービスに比べ、農林水産の労働生産性が低いことは共通しています。今後も、経済成長を求める各国において、それぞれの産業分野内の高度化と、農林水産から工業・建設やサービスへの構造変化が続くものと推測されます。

#### 4. 生産年齢人口の推移

経済発展は、各国の産業政策、グローバルな経済変動、紛争、自然災害、今回の新型コロナウイルス感染症など様々な不確定要素の影響を受けます。ただし、現在の人口構造からシミュレーションされる人口動態は、将来の数値まで高い精度で予測することが可能です。

図4は、国連人口部の中位推計 [United Nations, 2019]に基づき、各国の生産年齢人口の将来予測をグラフ化したものです。今後40年の増減率を括弧書きで併記しました。少子高齢化と人口減少が進む日本では34%もの労働力人口が減

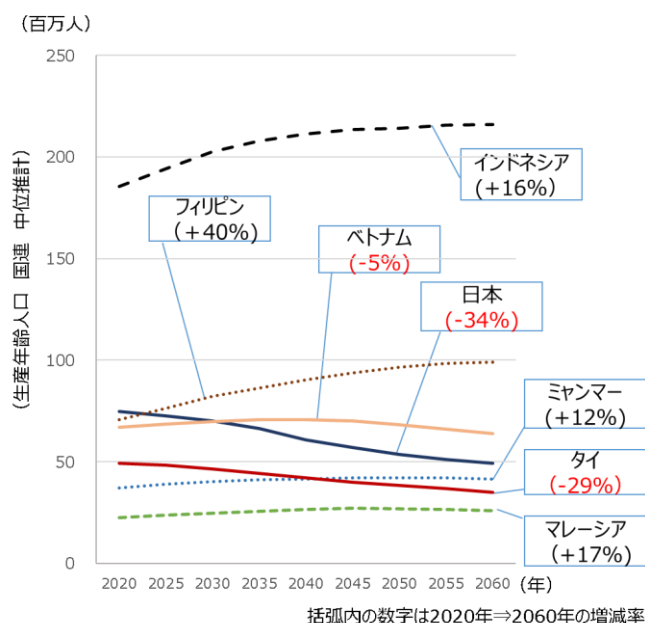


図4 各国生産年齢人口の推移

(United Nations (2019) のデータに基づき作成)



少することが見込まれます。

東南アジアの各国では、豊富な若年層を抱えるフィリピン、マレーシア、インドネシアなどで継続して労働力人口の拡大が見込まれ、中長期的な経済成長や働き手の確保の上では有利な条件と言えます。

一方で、周辺国より40年早く人口ボーナスのピークを迎えたタイでは日本と同程度のペースで労働力人口が減少する想定です。そのため、タイでは定年の延長やロボットの導入による生産性向上などの政策に力を入れています。加えて、ミャンマーなど陸路でつながる周辺国等からの外国人労働者もタイの社会活動にとって不可欠な存在となっています。外国人労働者の受け入れについて議論が進む日本においても参考となる事例があるかもしれません。

ここまで、各種統計データを比較することで、アジアの国々の相対的な位置づけを再認識することができたのではないのでしょうか？貿易や直接投資を行う対象国を検討する際、周辺国と比較して対象とする国がどのような特徴を有しているのかを定量的に把握することは不可欠です。県内企業の皆様の海外展開に向けて、本レポートが少しでも参考になれば幸いです。

## 5. おわりに

新型コロナウイルスの影響は様々な社会活動に影響を与えており、特にグローバルな人と物の流れを一変させています。我が家は妻と小学生の子ども達揃って、3月16日にセントレアからバンコクに赴任しました。小学校の一斉休校や日に日に厳しくなる渡航制限を考慮した上でのバタバタした出発でした。午前の出国ラッシュ時間にも関わらず、閑散とした空港ロビーや、搭乗率30%の機内は非日常感が強く、記憶に残る景色でした。

その後、3月18日にタイ民間航空局から発表された措置により実質的な入国制限がはじまり、3月22日からバンコク都内のショッピングモールなど人々が集う施設が閉鎖され、3月26日にはタイ全体に非常事態が宣言されるなど、状況は日々変化しています。外務省の海外安全情報配信サービス:通称「たびレジ」からは、東南アジア各国の規制強化情報が随時発信されており、当該サービスの非常時における有益性を実感しました。

本文書を執筆している本日も、タイ入国後14日間の自宅観察期間であり、実はまだ一度も職場に出勤できておらず、電話連絡やメールなど限られた情報下で在宅勤務することの厳しさを実感する日々を過ごしております。次回以降のレポートでは、新型コロナウイルスの感染拡大が落ち着き、企業訪問や様々なイベントを通じて収集したアジアの現場感をご紹介できることを願っています。

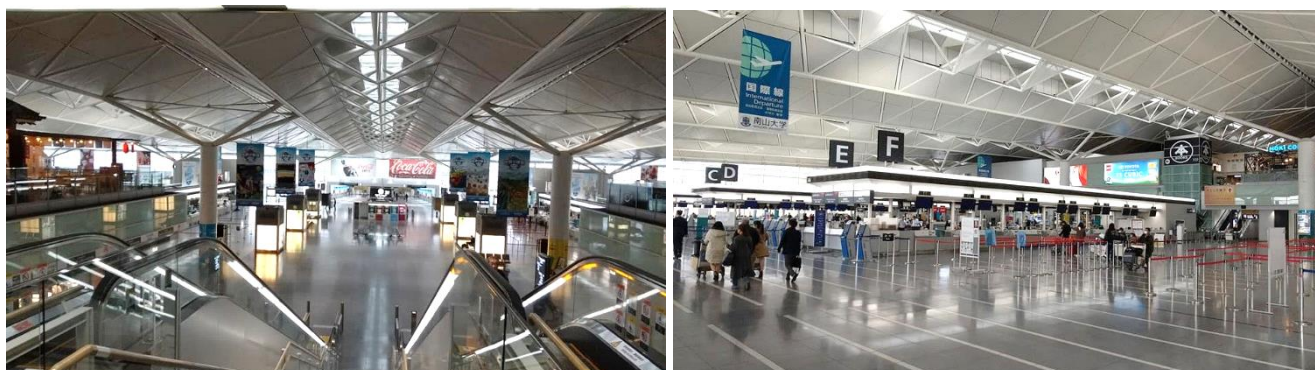


図5 閑散とするセントレアの出発ロビー(3月16日(月) 午前9時頃)

## 引用文献

- Hans Rosling, Ola Rosling and Anna Rosling Ronnlund. (2019). FACTFULNESS.
- GAPMINDER. (2020). Gapminder Tools. <https://www.gapminder.org/tools/>.
- Solt Frederick. (2019). Measuring Income Inequality Across Countries and Over Time: The Standardized World Income Inequality Database.
- The ASEAN Secretariat. (2019). ASEAN Statistical Yearbook 2019.
- United Nations Population Division. (2019). World Population Prospects 2019.

本資料は、参考資料として情報提供を目的に作成したものです。

バンコク産業情報センターは資料作成にはできる限り正確に記載するよう努力しておりますが、その正確性を保証するものではありません。

本情報の採否は読者の判断で行ってください。

また、万一不利益を被る事態が生じても当センター及び愛知県等は責任を負うことができませんのでご了承ください。